

博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	久保 昌子		
論文題目	養護教諭の職務の特性に関する研究 ～多様な職務の理解をめざして～		
	主査	廣瀬雄彦	印
	審査委員	箱田裕司	印
論文審査担当者	審査委員	谷川至孝	印
	審査委員	森下正康	印

本論文は、明治時代にその前身である学校看護婦が誕生して以降現在に至る養護教諭の職務の歴史的変遷、一般教諭と異なる多様な養成課程及び職場の状況を文献研究によって整理し、養護教諭の職務の特性を明らかにしている。次に、養護教諭に関わる周囲の者がその職務をどのように捉えているのか、あるいは養護教諭自身が自らの職務をどのように捉えているのかを調査研究によって明らかにし、これらの結果を養護教諭の職務の特性との関連で考察している。最後に、適正な養護教諭モデルを確立する上で、養護教諭の職務を捉える大きな枠組みを提案している。以下、得られた結果やその考察に関して評価できる点について章を追って紹介する。

まず、第1章では、現代の養護教諭の職務の特性について論考するにあたり、学校看護婦として誕生した当時から現在までの、養護教諭の職務の制度的側面、実践的側面、及び養成課程における歴史的変遷や現状について整理し、養護教諭の職務の歴史を職務の多様化の歴史として捉えた。そして、その多様化を促した要因が単に制度のみではなく、養護教諭のおこなってきた実践の中にもあったことをみいだした。また、多様化し続ける職務内容について、児童生徒や養護教諭以外の教諭といった周囲の者、さらには養護教諭自身ですら十分に捉えきれていない可能性を指摘している。

第2章では、大学生に対する質問紙調査の結果から、小学校・中学校・高等学校在学時に重要と感じた職務は、従来通りの「救急処置」「健康診断」といった職務に加えて、「心の相談」や「配慮の必要な児童生徒への対応」といった個への対応であることを明らかにした。また、「救急処置の判断と対応」や「特別支援教育と心の相談への支援」については、管理的立場の教諭や一般教諭からの役割期待と養護教諭の役割意識に差はなかったが、それ以外の職務に関しては周囲の教諭からの期待が養護教諭の役割意識を上回っていた。これらの結果から、学生からみた多様化の捉え方は養護教諭の捉え方とほぼ一致するものの、周囲の教諭からの捉え方は期待先行であるという現状を示した。

第3章では、養護教諭に対する質問紙調査の結果から、「ルーティンの仕事」に負担感を最も感じてはいるが、その一方で最も自信を持っていること、逆に「集団への対応と健康教育」について

は、負担感を最も感じていないが自信はないことをみいだした。また、勤務校が小学校から中学校、高等学校へとなるにつれて「個別の対応」への負担感が増大していることも示した。さらに、職務に対する自己評価が勤務年数11～20年で一時的に低下するが、その後退職まで単純増加すること、役割意識は勤務年数による変動がほとんどないこと、結果として勤務年数31年以上で役割意識と自己評価の差が僅少になることを見いだし、一般教諭との相違を明らかにし、その原因を一人職種としての養護教諭の特性から論じた。

第4章では、本論文における調査研究因子分析結果から、養護教諭の職務を「ルーティンの仕事」「個別の対応」「集団への対応と健康教育」の3つの観点から分類するという提案を行なった。このような養護教諭の職務の分類はこれまでになかったものである。最後に、他の教諭からの役割期待に関して、2000年前後と本論文との間に生じた変化を、過小期待から過大期待への変化として捉えた。

養護教諭の職務の多様性について、その歴史的変遷を丁寧に辿り多様化に至った道筋や要因を明らかにした点や、調査結果の分析をもとに養護教諭の職務を3領域に分類しようとする試みは、従来の研究では十分に取り組まれておらず独創性がある。養護教諭の職務の理解のみならず、養護教諭の養成、養護教諭の研修等に一定の貢献を果たすと思われる。ただ、調査結果を踏まえた主張の弱さや養護教諭と一般教諭における職務特性の相違に関する比較検討が不足するという憾みがあり、本論文によって一般教諭とは異なる養護教諭の職務の特性が十分に解明されたとは言い難い。今後の本課題に対する継続的な研究が望まれる。また、公開審査会において指摘された諸点についても、解決をめざした努力が期待される。

これらの点を考慮しても、養護教諭の職務の研究に新しい寄与を果たしたものとして、審査員一同は本論文が博士(教育学)の学位を受けるに十分な内容であることを認める。

